



「気候と音楽
—日本やドイツの春と歌—」

加藤晴子・加藤内蔵進 著
協同出版, 2014年5月
168頁, 2000円 (本体価格)
ISBN 978-4-319-00264-1

本書は加藤内蔵進 (以下 K 氏)・晴子 (以下 H 氏) 夫妻による共同研究の成果をまとめたものである。K 氏の専門は、日本を含む東アジアの気候と気象の資料解析, H 氏の専門は、音楽教育と声楽である。あとがきによると、H 氏が、研究対象の歌や詩の背景に興味をもち、背景にある気候との関連を K 氏が提案して、共同研究が生まれた。その15年間にわたる研究の成果が本書にまとめられた。

どちらの著者も大学の教育学部に所属し、気候や音楽の教育に関わっている。気候と音楽がコラボレーションをすることにより、学際的な教育が可能ではないかと考えている。本書は、そのような学際的な教育の可能性を提案する。

本書の構成は、以下の通りである。

- 第1部 日本の気候と季節感
- 第2部 日本の歌にみる春の表現 巡る季節
- 第3部 ドイツの気候と季節感 (春, 5月を中心)
- 第4部 ドイツの歌にみる春の表現
- 第5部 気候と音楽の連帯による学際的学習の試み

第1部では、日本の季節変化の特徴が、豊富なデータと共に語られる。後半では、日本画やブリューゲルの絵画に見られる季節感、和歌に見られる季節の微妙な表現がかなり詳しく論じられている。本書の表題は「気候と音楽」であるが、内容は、音楽だけでなく、絵画、詩に及ぶ。

第2部では、童謡や芸術歌曲に見られる日本の季節感が論じられる。

第3部では、日本の季節変化とドイツの季節変化の違いが論じられる。それを気候学的な視点から示すと同時に、そこで暮らす人々の感性が表現した季節感でも比較する。結果を一口に言えば、日本は四季折々

の特徴がはっきりしているが、ドイツの季節感、冬から春に向かう季節に集約される、といえるだろう。気温の変化から見ても、日本では、8月まで気温が上昇を続けるが、ドイツでは、6月以降の変化が小さい。(余談であるが、私の経験では、西ヨーロッパと日本の季節変化の違いは、日照時間の季節変化に感じられた。西ヨーロッパの冬は、午後4時になると薄暗くなり、夏は、午後8時を過ぎても明るい。)

第4部では、ドイツの歌曲に表現された季節感が論じられている。ドイツ語の歌詞と楽譜が豊富に引用されているが、ドイツ語も読めず、楽譜も読めない評者には、内容が専門的過ぎる感じがした。

第5部では、気候と音楽を総合化した学際教育の可能性が論じられる。新しい教育の可能性を示唆する提案である。

評者は、長年、K 氏の研究を見ているが、彼の気象に対するアプローチは独特である。グローバルな大気構造を視野にいれて、季節変化の微妙な変化に着目する。私自身は、できるだけ現象を単純化して考えるくせがあるが、彼は、単純化によって失われてしまうような微妙な気象の変化にこそ、面白い研究テーマがあると考えているように見える。季節変化といえば、天文学的な要因で発生するので、日射量に関しては、サインカーブ的な単純な構造が基本になる。しかし、実際の季節変化は、地域的な要因が加わり、変化の様相はかなり複雑である。音にたとえれば、基本となる正弦振動が音の高さを規定し、その上に重なった高調波が音色を決める。K 氏は、音の高さよりは、音色のほうに関心があるように思える。一見、捕らえどころがないような現象に着目して、気象学の研究にする。それは、地理学的な興味ともいえるが、気象学の枠組みに入れる点が K 氏の研究スタイルである。

一方、季節変化の中に暮らす私たちの感性は、その微妙な高調波成分の中に自然の美しさを感じとる。そして、その感動を絵画、詩、歌にして表現する。本書は、それを逆照射し、人間の感性が捕らえた微妙な季節感から、気象の微細構造の面白さを示そうとしているように感じられる。二人の著者の、息の合った二重奏である。

(放送大学 木村龍治)